

にい つま えつ こ
新 妻 悦 子

学位の種類 博士（教育学）

学記番号 教博 第 160 号

学位授与年月日 平成 27 年 3 月 25 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻

学位論文題目 児童の描画特性と認知スタイルとの関連性に関する研究

論文審査委員 (主査)
教授 本郷 一夫 教授 工藤 与志文
准教授 神谷 哲司

〈論文内容の要旨〉

子どもの描画行動を観察していると、専ら主題（What）に興味を示す子どもと、表現媒体の操作（How）に興味を示す子どもが認められる。これまでの描画研究では、描画発達は、認知の発達に伴う単一の過程であると仮定されてきた。しかし、このように描画発達を一元的な枠組みで括ってしまうと、現存する描画特性の個人差を説明することはできない。そのような点から、本研究では、描画活動に関与する「固有の要因」に焦点を当て、児童の描画特性と認知スタイルとの関連性を検討することを目的とした。

第Ⅰ部では、先行研究を概観し、本研究の背景と課題を明らかにした。また、新たな研究の方法と枠組みとして、実験心理学的方法と認知的・情報処理的枠組みを導入することについて述べた。

第Ⅱ部では、5つの研究を通して、描画制作過程の分析を行い、具象群と非具象群の描画特性を抽出した。研究1では、予め「点」や「線」を記した6種類のカードを用いて、描画の自由度を限定し、統制する「描画課題」を設定し、その妥当性を検討した。研究2では

6 歳～11 歳の子どもたちを対象に、描画課題を実施し、描画制作過程の分析を行った。その結果、刺激図形の「点」や「線」が主題に従属し、完成された作品が具体的な形態を表す「具象的 (figurative)」な表現と、「点」と「線」が具体的な形を担わず、抽象的な形式において展開される「非具象的 (non-figurative)」な表現が認められた。研究 3 では、この 2 つの表現に関して「具象性評定尺度」を用いて評定し、子どもたちを具象群と非具象群に分類し、それぞれの群の特徴について検討を試みた。その結果、表現タイプ群の出現は、年齢や経験年数の影響を受けず安定していることが示唆された。また、初発時間 (プランニング時間) に関して、具象群は非具象群より長いことから、刺激図形を自己の視覚的体験や概念的な知識と「照合」し、具体的に意味づけていると推測された。一方、描画時間に関しては、非具象群は具象群より長いことが分かった。

研究 4、研究 5 では、研究 3 の結果を補足する分析、具象群における「共通反応」の出現率の検討と描画特性の一貫性に関する検討を行った。その結果、具象群では「共通反応」がいずれの年齢群でも出現し、描画時間の加齢による変化を抑えていると考えられた。また、表現タイプ群の出現には一貫性が認められ、プランニング特性や描画行動特性が比較的恒常的なものであることが示唆された。

第Ⅲ部では、4 つの実験を通して、具象群と非具象群の描画特性を規定する要因を探った。研究 6、研究 7 では、WISC-Ⅲ及び DN-CAS による検討を行なった。その結果、WISC-Ⅲでは差異を特定できず、DN-CAS では「同時処理」と「継次処理」に関して具象・非具象群間に差異が認められ、表現タイプ群の認知処理の差異を説明する概念として有効であるという一定の結果が得られた。しかし、下位項目では実施上の問題点が指摘された。この問題を解決するために研究 8 では、認知過程・様式の質的差異を説明する構成概念、「場依存・場独立」認知スタイルに着目し、図形埋没検査 (EFT) によって、知覚の場を構造化する際の個人差を検討した。その結果、具象群は「場依存型」との関連が、非具象群は「場独立型」との関連が示唆され、ゲシュタルト法則に従い知覚的体制化を受けやすい傾向に差があることが分かった。さらに研究 9 では、「場依存性・場独立性」と「大域処理・局所処理」の関連性を検討した。その結果、具象群では「大域処理」の優先性が、非具象群では「局所処理」の優先性が認められ、具象・非具象群の差異は「場依存的-場独立的」「大域的-局所的」次元上で捉えられる認知特性と関連することが示唆された。

第Ⅳ部では、研究 1～研究 9 までの結果に基づき、描画制作過程において、トップダウン処理とボトムアップ処理の基本的な流れと認知スタイルがどのように関連し、描画行動の個人差を生み出すのかを説明するモデルを提案した。このモデルにおいて、具象群ではトップダウンの概念駆動型の情報処理が、非具象群ではボトムアップのデータ駆動型の情報処理が優位に駆動し、相互作用的に働く 2 つの情報処理の強弱が描画特性の差異を生み出すプロセスが示された。本研究で提示された認知モデルは、描画の認知的研究の視点を拡大すると考える。

〈論文審査の結果の要旨〉

描画発達の領域は、発達心理学において古くから関心が持たれてきた領域である。しかし、多くの研究は、幼児期における描画発達に焦点を当て、その発達過程を主として認知発達との関連で捉えようとしてきた。そのような流れの中において、本研究の特徴は、第1に児童期の描画発達に焦点を当てたことである。第2に、本研究は、認知発達の段階あるいは水準ではなく、認知スタイルといった認知の個人差の視点を取り入れることによって、認知に関する一次元的な発達の枠組みでは捉えることができなかった描画特性の個人差を明らかにしようとした点である。具体的には、点、線などの一定の刺激を与える状況下で子どもがどのような描画を描くのかといった点に着目し、描画特性とその規定因を明らかにしようとした本研究は、主として次の3つの点において評価できる。

第1に、描画特性の個人差を表す指標として、「具象群」と「非具象群」の2つの描画タイプを見出し、各タイプの描画特徴を明らかにした点である。すなわち、①描画タイプは、年齢や絵画の学習経験の影響を受けず、比較的安定していること、②具象群は描画までの初発時間（プランニング時間）が長いこと、③非具象群は描画時間が具象群に比べて長く、年齢とともにその時間が増加すること、などが示された。

第2に、描画タイプを規定する認知的要因を明らかにした点である。すなわち、描画タイプと認知発達を指標とする WISC-III、DN-CAS などの検査項目との関連は弱く、むしろ図形埋没検査（EFT）によって表される「場依存—場独立」認知スタイルとの関連が強いことを見出した。

第3に、9つの研究を通して得られた結果に基づき、描画制作過程の認知プロセス（情報処理）モデルを提案した点である。このモデルでは、認知スタイルによって感覚信号処理（ボトムアップ処理）が優位になるプロセスと概念駆動処理（トップダウン処理）が優位になるプロセスの2系列が想定されており、描画に限らず、他の造形活動の表現タイプの違いを説明する上でも適用可能であることを示唆した。

描画制作過程の認知プロセス（情報処理）モデルにおいて、状況認知と判断のプロセスがどのように関与するかといった点についての考察には残された課題もあるが、多くのデータを用いてこれまで十分に検討されてこなかった児童期の描画特性と認知スタイルとの関係を明らかにしたことは、発達心理学に新たな知見をもたらしたと判断できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。